

高橋秀寿教授 学歴・職歴・業績

【学歴】

- 1981年3月 立命館大学文学部史学科西洋史学専攻卒業
- 1985年3月 立命館大学大学院文学研究科博士課程前期課程史学専攻修了
- 1988年3月 立命館大学大学院文学研究科博士課程後期課程史学専攻単位取得退学
- 1988年6月 ドイツ連邦共和国ケルン大学留学（～1991年3月）
- 1999年9月 博士（文学）（立命館大学）

【職歴】

- 1998年4月 立命館大学文学部助教授（～2000年3月）
- 2000年4月 立命館大学文学部教授（～2023年3月）

【業績】

（著書）

- 『再帰化する近代—ドイツ現代史試論 市民社会・家族・階級・ネイション』（単著）国際書院、1997年。
- 『ドイツ国民とナショナリズム—1770-1990』（共訳）名古屋大学出版会、1999年。
- 『ナショナル・アイデンティティ論の現在—現代世界を読み解く』（共編）晃洋書房、2003年。
- 『東欧の20世紀』（共編）人文書院、2006年。
- 『グローバリゼーションと植民地主義』（共編）人文書院、2009年。
- 『境界域からみる西洋世界』（共編）ミネルヴァ書房、2012年。
- 『ホロコーストと戦後ドイツ—表象・物語・主体』（単著）岩波書店、2017年。
- 『時間／空間の戦後ドイツ史—いかに「ひとつの国民」は形成されたのか』（単著）ミネルヴァ書房、2018年。

（論文）

- 「第一次大戦前ドイツの労働者の家族生活—ルールにおける居住・性・権力」『立命館文学』502、1987年、54-87頁。
- 「ジプシー・同性愛者・過去の克服」『立命館史学』11、1990年、141-162頁。
- 「ドイツにおける「ネイション」概念の現実」『立命館国際地域研究』3、1992年、33-43頁。
- 「現代ドイツ家族の歴史的系譜—「ポストモダン家族」概念をめぐって」『立命館文学』532、1993年、110-148頁。
- 「今日におけるドイツ極右現象の歴史的位相」『思想』833、1993年、63-89頁。
- 「ドイツ近代史における「Bürgerlich 性」—「健康」と医学・医師をめぐって」『立命館文学』534、1994年、268-286頁。
- 「ドイツ人の「脱国民化」？—ヨーロッパ統合期におけるドイツ「国民」概念の変容」西川長夫・

- 宮島喬編『ヨーロッパ統合と文化・民族問題』人文書院、1995年、130-150頁。
- 「ドイツ「国民」の歴史的変遷と現在—ミリューと「想像の共同体」」『立命館言語文化研究』6(5-6)、1995年、83-102頁。
- 「ドイツ「新右翼」の構造と「政治の美学」」山口定・高橋進編著『ヨーロッパ新右翼』朝日新聞社、1998年、45-86頁。
- 「記憶なき社会—戦後ドイツ? 時間・歴史学・近代化」『立命館文学』558、1999年、355-375頁。
- “Immigrants and Ultra-Rightists in Germany”, in: T. Miyajima, T. Kajita & M. Yamada (eds.), *Regionalism and Immigration in the Context of European Integration*, Osaka: National Museum of Ethnology, 1999, pp. 199-208.
- 「ホロコーストの記憶と新しい美学」『立命館言語文化研究』13(3)、2001年、145-157頁。
- 「ナショナリティ」矢野久・アンゼルク・ファウスト編『ドイツ社会史』有斐閣、2001年、215-234頁。
- 「レイシズムとその社会的背景」宮島喬・梶田孝道編『国際社会④ マイノリティと社会構造』東京大学出版会、2002年、95-119頁。
- 「ナチズムを、そして20世紀を記憶すること」川越修・矢野久編『ナチズムのなかの20世紀』柏書房、2002年、270-329頁。
- 「ナショナルな音楽、越境する音楽」立命館大学人文科学研究所編『立命館土曜講座シリーズ⑬ 現代社会とナショナル・アイデンティティ』立命館大学人文科学研究所、2002年、41-72頁。
- 「ドイツ人の脱ナショナル・アイデンティティ?」『ドイツ研究』35、2002年、2-8頁。
- 「ナショナルな時間、ナショナルな空間」中谷猛・川上勉・高橋秀寿編『ナショナル・アイデンティティ論の現在』晃洋書房、2003年、175-201頁。
- 「ホロコーストの記憶と東ドイツの変容」『立命館言語文化研究』15(2)、2003年、95-99頁。
- 「序文 東欧—ヨーロッパの「東」」高橋秀寿・西成彦編『東欧の20世紀』人文書院、2006年、7-31頁。
- 「社会主義国家の建国神話—『戦艦ポチョムキン』から『グッバイ・レーニン!』まで」高橋秀寿・西成彦編『東欧の20世紀』人文書院、2006年、269-294頁。
- 「記憶と空間—西ドイツにおける『故郷(ハイマート)』の変遷」『関学西洋史論集』29、2006年、15-26頁。
- 「戦後ドイツと植民地主義—40-50年代におけるロシア観と西ドイツ国民の形成」『歴史家協会年報』3、2007年、1-19頁。
- 「ドイツ「零時」の表象—瓦礫と廢墟の記憶」『立命館文学』597、2007年、154-166頁。
- 「「靖国」と「ヒロシマ」—「記憶の場」の日独比較の視点から」『季刊日本思想史』71、2007年、6-25頁。
- 「敗北の「抱きしめ」方—ドイツと日本」『立命館言語文化研究』19(1)、2007年、175-189頁。
- 「「植民地忘却」と「ホロコースト忘却」」『立命館言語文化研究』19(1)、2007年、243-250頁。
- 「식민지망각과 홀로코스트망각 (植民地忘却とホロコースト忘却)」『비평 (批評)』14、2007年、143-156頁。

- 「アンネ・フランクの笑顔—50年代以降におけるホロコーストの表象」『立命館史学』29、2008年、21-39頁。
- 「ホロコーストの物語—占領期ドイツにおける記憶と表象」『立命館文学』604、2008年、155-179頁。
- 「ポスト・フォーディズムの時間・歴史意識と〈ホロコースト〉の誕生」『ゲシヒテ』2、2009年、3-20頁。
- 「占領・植民地化・セクシャリティ」西川長夫・高橋秀寿編『グローバリゼーションと植民地主義』人文書院、2009年、333-352頁。
- 「‘야스쿠니’와 ‘히로시마’ (「靖国」と「広島」) 전진성 (チョン・ジンソン)・이재원 (イ・ジェウォン) 엮음 『기억과 전쟁 미화와 추모 사이에서 (記憶と戦争—美化と追慕の間で)』 서울 (ソウル) : 휴머니스트 출판그룹 (ヒューマニスト出版グループ)、2009年、277-300頁。
- 「『第二の罪』の時間/空間—復興期ドイツにおける国民形成」『立命館文学』616、2010年、26-61頁。
- 「68年—ドイツ現代史の転換点か、神話か?」『ゲシヒテ』4、2011年、66-72頁。
- 「冷戦の境界ベルリンの空間形成」田中きく代・中井義明・朝治啓三・高橋秀寿編著『境界域からみる西洋世界』ミネルヴァ書房、2012年、223-243頁。
- 「ドイツ大衆音楽の空間表象—民謡からパンクまで」『ドイツ研究』46、2012年、47-62頁。
- 「ドイツ極右主義—時間/空間の構造的変動と多文化社会」『立命館言語文化研究』28(4)、2017年、193-243頁。
- 「ドイツにおける他者の記憶と権利—序文に代えて」『立命館言語文化研究』29(1)、2017年、85-87頁。
- 「ポピュラー・カルチャーにおける破局の風景—日独比較」『立命館言語文化研究』29(4)、2018年、155-170頁。
- 「ヒトラーが『最期の12日間』から『帰ってきた』わけ」『ドイツ研究』52、2018年、42-57頁。
- 「50年代～70年代の西ドイツにおける反ユダヤ主義—その克服?」『立命館文学』661、2019年、103-111頁。
- 「戦後ドイツにおけるヒトラーの表象—悪魔からコメディアンへ」渋谷哲也・夏目深雪編『ナチス映画論—ヒトラー・キツチュ・現代』森話社、2019年、139-161頁。
- 「皇帝のいる風景—世紀転換期の帝都ベルリンと国民表象」『立命館言語文化研究』31(4)、2020年、171-176頁。
- 「モダニズムと国民表象—E・バルラハの描いた死者の風景をめぐって」仲間裕子／竹中悠美編著『風景の人間学—自然と都市、そして記憶の表象』三元社、2020年、78-99頁。
- “Die nationale Repräsentation in Berlin um die Wende zum 20. Jahrhundert”, in: Yuko Nakama (Hg.), *Aufbruch der deutschen Moderne und die Kunst in Berlin*, Kyoto: International Institut für Sprach- und Kulturstudien der Ritsumeikan Universität, 2021, S. 115-119.
- 「反ユダヤ主義とは何か?—ドイツにおけるユダヤ人表象をめぐって」『立命館言語文化研究』34(2)、2022年、195-223頁。

(その他)

「ヨーロッパ極右現象—近代化の敗者／ネイション／マルチカルチャ社会」竹内実／西川長夫編『比較文化キーワード』サイマル出版会、1994年、235-243頁。

「二重国籍」「再帰的近代化」西川長夫他編『グローバル化を読み解く88のキーワード』平凡社、2003年、135-137、208-210頁。

「過去の克服」と国民形成」倉沢愛子ほか編『岩波講座 アジア・太平洋戦争1—なぜ、いまアジア・太平洋戦争か』岩波書店、2005年、6-8頁。

「グローバル化時代における戦争の記憶—ドイツ人の空襲経験をめぐって」『図書』706、2008年、26-29頁。

「国家が生んだ儀礼」『毎日新聞』2013年10月18日号、2013年、10頁。

(書評)「W・シヴェルブシュ著、小野清美・原田一美訳『三つの体制—ファシズム、ナチズム、ニューディール』」『西洋史学』259、2015年、250-252頁。

「過去の克服」「政党文化」「ホロコーストの記憶」「過去への憧憬」「移民問題と極右勢力」田野大輔・柳原伸洋編『教養のドイツ現代史』ミネルヴァ書房、2016年、242-245、308-312、312-315、317-320、321-324頁。

「ドイツと右翼ポピュリズム」『Voters』36、2017年、10-11頁。

(書評)「井関正久『戦後ドイツの抗議運動』(岩波書店、2016年)」『歴史学研究』966、2018年、61-64頁。

(書評)「川喜田敦子著『東欧からのドイツ人の「追放」—20世紀の住民移動の歴史のなかで』(白水社、2019年)」『西洋史学論集』57、2020年、43-46頁。

(文献紹介)「アネッテ・ヘス『レストラン「ドイツ亭」』」『産経新聞』2021年3月14日号、2021年、11頁。

(書評)「水野博子『戦後オーストリアにおける犠牲者ナショナリズム—戦争とナチズムの記憶をめぐって』」『歴史学研究』1012、2021年、61-64頁。

(文献紹介)「ベティーナ・シュタングネト著『エルサレム<以前>のアイヒマン』」『公明新聞』2021年8月23日号、2021年、4頁。